



歳時集

レ

^ 5
6505



15
6505

長嶋拾山

白鱗舎と号と梅壺河
三河人 京都に住也

騷雲雜書文庫



天地の是是是の父母をりたり形をり生るるを
持はははは魔は奴をり生死の苦海を宿を
偏執濁世の波逆をり世程をり神を因成
よを給ふら然しもみしはるるをり
大徳神を禪坐致甲子をり何うか神威
あつたまりを禪坐致神をり聊神を伺
をりんをりを思ひ去る中好るあり此地
あり先をりあり内外なる言をり衆をり度

010186022004

詔指以依く、靈告紙を爰りし、も亦書きたるを
と書く、或は袖紙に「はまもく」因の風土
と書く、亦袖紙に「はまもく」の折言ある、風
雅をこふ、若くは「はまもく」亦相應る風雅也
風雅は玉紙に「はまもく」神意をこれに書き、又風
調紙に「はまもく」曰く「はまもく」一句、亦あり
前句は亦自然なる見ゆ、思ふに「はまもく」案
「はまもく」或は「はまもく」亦「はまもく」自然



安んずるを、是則天地の言、靈をこふ、爰りし
神勅の旨、情紙に「はまもく」の也、亦「はまもく」の言、
符字を合し、是則正風物、言はく、
術に「はまもく」傳る、あり、かき、以て理術は、おち、り、
亦、亦、色、格、に、今、格、外、に、
と、も、亦、亦、紙、に、
亦、亦、紙、に、
亦、亦、紙、に、
亦、亦、紙、に、

彼地を去り先諸風土其白紙撰りて在郷の
末々其書ありて殊に日月の事物語り主なる紙
多し家才出づつを憐れ給ふ行道の事ありて
持てその海邊を行程の徳の事天國の事
報し傳ふんと唱る海名見名禮ぶ歌り言
船の感はしき事其書かきしもの事其感得
集りて其那し傳りぬ 白鶴集拾山

猶月を免り言ある白友人の事其書きしこと
乃潮の事其書をきしこと其書きしこと其
大意大態乃其書をきしこと其書きしこと其
事其傳りぬ其書きしこと其書きしこと其書
ありしこと其書きしこと其書きしこと其書
傳りしこと其書きしこと其書きしこと其書
し其書きしこと其書きしこと其書きしこと其書

一日の口木改けーのさくろろ系
 梅さーしまくろれり塩たわ
 い祿んて二日ろろや多んー欠
 蹴至の早もろれてきーろ飛
 五云のきまれのまや福あそ
 えまも又えんろれてまのろ
 明てまこまろーろあり梅八月
 風ありこし樹ろほーき柳ろ那
 雲尚



宜良あふりあろり理まの雪
 持て出るともー火いやー鳥のた
 浮あろる勢の物ろふきを藤ろ那
 たう集るろろこのとりよな新巻我
 加ろろてり道近き後ろーの南
 あと先ろ人のふき脚やまろきけ
 由れ是れはのゆりやそつ日ろけ
 を山改めろろろろろろろろろ
 示遊

示遊

樹くまゝ花承らば便と云ふのりは
内々付の思ひあはれり約いさし
うゝ道も志す人多し一暮乃風

旅宿追々

致波付の舟は急もあれ在の去
田うらゝ通ぬ道そくつきとく
雪やろるや毎夜ふのほきし常夜中
石道もり人かゆくやまき、那
風もなき甲の程長し浦はさし
空のろるやけし祿出は雲う角

土前
甲白
其國

梅程
土芳
飲当
羽洲
象竟
一法

はまうりれおおしてゆきぬを懐いと
おとさして之由り中をりや田る序
顔承ふる甲の出乃るやうへ、序
口きのぬれ由とくあり花のうけ
是代中ぬけらゝゝあしゆり一花見
る承来て小ちもむむに遠るり
山ふきやぬるふれとるふ乃うへ
帷帳の遠る並木やと歌乃月
是もや承る魚屋のさるとやせう那
ひと川かく桂や更て又此堂川

碛石
華岳
の志
左之
素水
瓦塔
竹陸
華夕
素波
鶴望

雪もや吹ゆる白き磯もよけ
岨崎乃思ハせあり花来てわり
静さこそよきや花の来ると就
あつきの家もあつきのありそ
子あつきの家もあつきのありそ
かしてふゆふゆあつきのありそ

雪
岨
静
あ
子
か

秋もや遊ふあつきのありそ
卯のなや送る出されともなふ
乙の外のあつきのありそ

不
九
乙

雪もや吹ゆる白き磯もよけ
岨崎乃思ハせあり花来てわり
静さこそよきや花の来ると就
あつきの家もあつきのありそ
子あつきの家もあつきのありそ
かしてふゆふゆあつきのありそ

雪
岨
静
あ
子
か

雪もや吹ゆる白き磯もよけ
岨崎乃思ハせあり花来てわり
静さこそよきや花の来ると就
あつきの家もあつきのありそ
子あつきの家もあつきのありそ
かしてふゆふゆあつきのありそ

雪
岨
静
あ
子
か

米ふむし遊ひ仕こしやうきつこ
所ぶくくほくきのむらやぶ米乃む

大竹
柯笛

古沼の瀬のこしこく免乃花

星岬

引出して鞆こまもや拂おくさふ

早坂

人の手らうくぬ科理やそつ能

白水

切成してはふとらふりぬ九自巻

南木

川せいの徑乃じりや小六 月

南耕

あふれ出るおとそくきり初つを

作河

こつやせぬやうくし敷の搦

眉峰

いと心助もねらそこ跡は川小松

林崎

山庄浦にて

去るやおくうくるさふり免さ記

拂谷

笠巻全う換き座とりやふく水竹

糸毛

短つて咄しときりけきうう那

如翠

大流の膚のるさ系うして葉の花

小角

おむしとる物むつましき小虫哉

お石

昔摺指をばふら拾はせまつ時る

無節

は系切をやきのふらるの物しほく

南段

出て又さし流るもおとそく敷の巻

氣一

玉の光りや花
を直に日南り又申す拈ゆら南

右橋
阿籠

浦津よりふたなく能く乃馬

春松

あうら我志く月のいづか

二舟

照さほるものなき月や海乃く

玉を

目さましく又申すあそよきう那

一笑

柳いきくやいとく不や夏乃月

蒼月

東風いやる名来改漢よ清の和

生破

あゝ来ておそくきくや水の音

茶山

後やうこ似てあゝ新の小船後

去らうる石糸ゆきくこ終乃葉

葉砂のあはれうる成きあけて

いふ終らあはるはつあふきこ意

取うるこ意にも別し化粧部を

とくくと嵐をささせ尔を我

を迷ふ忘へ来る尔ハまこよこる

伸たうぬるうひくくあ仙

湯洗子あうれのきむもぬのうら

やして又さきはけ十乃城あそ

山 谷 山 谷 山 谷 山 谷 山

あせし忘らや絲と内乃杖
初しく細るあしきき
やう果も彼岸のうらみの透凡
あきそこあしき紙り
流ひゆき子者の塩をん
徒足されしる家のゆき
凡呂あし是ぬそめ花れ研
ううい糸掬子あ乃あし

山谷山谷山谷山谷

あせし忘らや絲と内乃杖
初しく細るあしきき
やう果も彼岸のうらみの透凡
あきそこあしき紙り
流ひゆき子者の塩をん
徒足されしる家のゆき
凡呂あし是ぬそめ花れ研
ううい糸掬子あ乃あし

拾山 山谷山谷山谷山谷

う祿りある本も其まの所を
 徳ふ能ふ宜地ありあり
 ありは以てあるし一歩の夕まゝ
 さやく隙尔ぬるまゝ乃月
 葛の葉乃うら端のれも神心
 篠り乃前を歩のそりく
 ひとりたれお通されぬありは向あり
 狗も昔用のんやい一めきつけ
 梅のさくはは位もふん屋き
 赤地乃徳杯尔朝日きくはく

山 谷 山 谷 山 谷 山 谷 山 谷

梅裡

そ祿とえ一里もさほりわさる
 上漸尔きゆる月乃朝のけ
 徳とり乃まゝくちさい花ふりて
 和をれてよひやんふ用ハ系し
 あり出もさうぬくそ神の影を
 る〜く〜さるさ度乃火〜片里
 は心おの中尔何やうと産もあ
 おんうさふいとそ祿あり乃酒

山 谷 山 谷 山 谷 山 谷

内ありきし風成時出して
糸江の使ふ可く教うく
時おの許う身もある思ひと
をとり信念のうを以深いろ
白うけの横うも心る無き種
こほれくも成ふむもいや
赤種くも世とすれ素い木当
之てきき昔いお系成好
龍石もおうてとつろく花の危
るくも心成あし可るなる

裡 員 裡 員 裡 員 裡 員 裡 員 裡 員

志む成成をきん種子の啼うり
うてきく祢の向井はぬも
國を名尔よら時ハるお多うい
ゆ南うよさ尔取く古子屋
迷惑ふ身を途中より捨て
祢むるん城波のよう捨てある
神くもの色うもあいあ玉縁
女子うもなる宵乃旅し
うもきり望ておれぬ赤あを地
二階くしと成らるる足お

裡 員 裡 員 裡 員 裡 員 裡 員 裡 員

いさゝか風晴るゝ又て梅の月
 樽に花尔をみるもいづそり
 街道へ出れらゝと逢ふ出来
 乳忌争へて袖ぬきと乳
 とつと子供の糸まる未別う
 わりてかゝるもまゝ者矣る 湯
 背戸口へ出てかゝるむむし
 出れり東風のうつくしむと

綱 頁 綱 頁 綱 頁 綱 頁

雪もやあふらゝとつと雪の初雪
 叶に我ふらもちつとつ口那
 秋の澄ものと又えはり濁りぬ
 五月ののいとまもありて並つ山
 ちり鳴てさ海とありはりは木の葉
 了契你き月乃定りや神話山
 むしなくやいと定はる時かくし
 氷鞋を脱く靴や杖乃く靴

玄 又 吉 甲 奈 又 除 水 案 切 歧 風 世 外 号 又

一のよにふるあ田のふりやをる風
をそらぐやえりあやこてちと乃出ん
杖風や松らきこのふ乃吾あう
皆露尔来てぬるし一宵のる
り序や芽屋尔文し灯のいと山
隅うらむとけし山東をさう南
夕曛のさえて又日乃月あう風
を落てし凡日七十日乃ひうりう春

い初降とまきのあるや時乃能

貞吉

叔外

竹春

子舎

孔集

深梁

哲史

稲丘

義玄

きし一啼や遠山甲の初くもり
よ来の書や柔くあうこまる初心
うかさとあられぬあう初財白
日持のうけ也や去る秋のあと乃能

花山にて

波中

凌中

鴨島

風出

杖も根日ましこ子て人出入
思ハれも除入去るる花燈う那
此いとつとあらぬるし一子枕
来の近る介とらえん三男有
子のたもえれこ宗てけ子乃月

三種

竹甫

義雷

子賢

今我

浄室

やぶるてる志る花の木ふら南
井風のそ子中とりやまの南
風とまろる水も杖の雪

福花
雪水
雪秀

良色を原にて

何れも有て何喰ふるを雪まに
つらぬるのひけて花の更
梅咲やそ影の心さるもか
きくを人の海へまれてるつ

梅雪
甲雪
一風
雪翠

あつらふよきお生れりえつ
渚までまゝておむえつ日那
九日もきて即ち果の日記る系
ひつそりとむらさきやほあき
けふ人のあはしも又久し雪乃房

梅更
稀月
海水
春味
巴川

果や

介寺と思ふう岩の形偏まで
白近き日るぬくもりや大根川
是れとて改思ひ直しぬを赤もり
樹茂もれら能よふ物やほもる雪

茶便
雪玉
一花
紫柏

ふるやの海のくさくさう風巻く
青きるらむのやをそとる木の葉
つとふえぬ人もありそ朝の雪
志くさくさくやうさうさう近めらう
押あふぬくいう鴨の水のうさ
なきさく日や船も流るのあふむ
こころをそつと来てあふむさうさ
を流しさ波のうさうさうさうさ
多てめう程あるやうさうさう
志くれ来るのをまき種う山の鳥

札
一 松
一 汎
翠 松
松 二
椿 許
花 木
南 松
梅 花
鳥 竹

ふるものやうに思ふあふ那
あふさうあふさうさうさう
啼や花散れぬあふさうさう
あふさうあふさうさうさう
雨月のあふさうあふさう
徳のあふさうあふさう
さうさうあふさうあふさう
は入つてあふさうあふさう

流翠

ふるものやうに思ふあふ那
あふさうあふさうさうさう
啼や花散れぬあふさうさう
あふさうあふさうさうさう
雨月のあふさうあふさう
徳のあふさうあふさう
さうさうあふさうあふさう
は入つてあふさうあふさう

拾山
翠山
翠山
翠山
翠山
山

志ふ紙の目おぼとけをゆくは出でて
 掬のうらにもいほくくわのそ
 舟ゆりて揺るけりては揺れし
 しく心ゆくあふる此や涙らけ
 月多うお世の後るゆわたり
 人ふしと志ききこわ我の若
 蒼にいと玉子あふをほきん
 あうりさかり乃末尔村のあ
 椽先の窓はあかつ花の雪
 削る梅乃に玉ふ取あ

山 翠 山 翠 山 翠 山 翠 山 翠 山 翠

即遊ひ申うれれを御いづらと
 あまま刺と世一長品乃見
 西行乃往念の杖は其まゝ尔
 このあらうらうおれまゝおれ
 川てまゝ大招の糸も揺らけ
 灰糸あふまてたぐこほあり
 又申すそわらうらもそほて
 踊をぬけていけのるくや
 垣ひしく外らゆあの内さや
 凡尔端のきこえはあえさて

翠 山 翠 山 翠 山 翠 山 翠

く梅に敬中帛の神輿はとちり
ふく神をささる後撫てみれ
うさしうささうさうさもれぬて
も神降も又はやきあらる
午刻の云里の進きうり坂
硯かりてもうにいくき字
花のこむ波ありのなも神
たけおささききわわら

翠山 翠山 翠山 翠山

二宮や人余志しき意うはり
去のこまも余身しんは伏乃香
東風さるつげ物桶の壁のけて
あへしおと神し今半乃ことお里
りあし砂乃浅淵のえ中月
穂波ささささささきつるお川
剥ら月とと杖さるよりせさかり
讀る次第成字てみれ牛

拾山
素山 山 山 山 山 山

けい助ら石言まゝあゝ道、度く
三耳のあや欠るる介もて然せう
はき合の二足耀るも此代又こりて
もむね織の伯母乃もあはと
月こ出る、みも小左の廓通ひ
未免とまゝ ねるか神枝
西供共火弁の煙のたゞ色は
備前徳利代持ふ色しりり
何ともちりてあるるあぢう
望我くれと人の後や

山 山 山 山 山 山 山 山

廿五

祝け助の又由る代助を糸事
いつ入うとも海てある風呂
子うわゝ二十六巻の証うり
場さうゝふくゝあふきむら
又通る湯糸下持乃先んい
さゝ遊いの詫もいを被す
苔の氷の眠り代さまは石月枕
とふさ多分より薄てくるる
帷被の柄を引出し寝て
あゝそしきういゝつせりあ

山 山 山 山 山 山 山 山

右舟改役のりそあししく
あしうらうらういれり九年舟
忌争しの高し息まむ流のち
子別の拂いらく在のえうい
と脚を改ましく老紳改はとし
か秋ぬとし候一候よ臨竹
るに在るおふら通ふ風ふそく
うけ又あき能つとしし火

山 山 山 山 山 山

柳あふてもふろしのかや池の鴨
福来子吹や京石乃あし鳥
いとむれらしう神の中や夕うそ
侍人もきて焚火やあし雪
又る雪と流るゆきや田子の浦

柳 梅 梅 柳
友 友 友 友
友 友 友 友

けり了る杜の目飾や相くさけ
あのみきおをぬるまできりくは
けけろはわゆるさならきんるり
枝おちるいとう笑くやあは時る

夜 白
花 子
子 子
子 子

吾も葉ふこゝま雷の巻ぬれ
 省古
 又うらわのうらゆき能う那
 甲白
 畜定てもまうて早いひるまこと
 白赤
 所とソ子形をかりや梅も形
 嘘偽
 木の子孫押ととされて杖う壁
 碩山
 いと樹あるねる肥のり枯脚哉
 二嘯
 身は流うらみそくち枯脚系
 又古
 係る能のそや解出来たり
 泉松
 神風は解文うー伊勢の海
 去ま

海士の子も心内、まよふまいたり
 蓬雪
 去のるふらうくやかうえり
 乃古
 早よりくふ飛うあるいこりうれ
 梅土
 う海までまーくありぬ神伝山
 の中
 神杖や五ふううとゆる細う人
 冬霧
 いさ出んいぎやあんと雷の岩
 黒川
 やさ入る水の泡もつ小をう那
 柳る
 あるふまうらふまき伝まうや楷めり
 在休
 えかへりも鶴きくるの月あう那
 ちま

山甲ら雪の白さもまきりけり
 月も如日も如志と——子由木もろ
 川魚の稚ふいとふりて喜のり
 二三端様も笑ふふえれ一や南
 うぐれをそよの樹もある根殺垣
 あまての山より九枝のふりしと甲
 是こ日のこせとくろをる二月う茶
 行く車を道と除く——う免乃花
 東々屯の水と志と——やあ——山
 夏山
 錦市
 系藩
 冬秀
 旭富
 杜水
 嵐牛
 鶴元
 流電

吸まてら人もまきぬやう免の花
 屯るるやれふのこもさ、一進神くら
 雲中へ出て暮ひり比るを——
 子むらふ火目くくありし木槿うか
 又由るおも又えぬおもある柳うれ
 松らふやまら神ををき得のあり
 柳よりぬて日おやをて予——
 まるのまき脚ふまはけりける
 ありるの夕やもよ——梅雪
 松の香とされつ——やあ——
 ね山
 芽子
 貞山
 尾村
 大虫
 思来
 見外
 早郎
 渡富
 号哉

塩倉電のくさくさ收洋ふくまし哉
 まささぬえつ日白ふや中松子
 一のけ鯛や子孫裔りきむくし家
 笑ふふふを是て能よるあも
 日のあふふおて足てさぬきつえと
 射くける虫やふ所中の山乃月
 つるうらうり川をくもる大松う那
 蓬菜らまつ健乃白いう南
 二月るやいと回くまふれてふる
 东风いやまき松とぬ仕を紀

去以
 奇宗
 官磨
 定總
 弘員
 五階
 既平
 幽止
 とき終
 氷至

かぶ老糸て

心も老をぬれや能乃其
 木のるくあさささるれの中
 おふふの月あふ秋ぬおもて
 うへさ表乃やをきうさる
 川出く鯛く門乃人通り
 石をくわく皆いれて由くる
 治の香も糸る日柄の影け
 よまぬ敷くかふとくら茶

拾山
 又山
 又山
 又山
 又山

去又

子伏すあを話やくまての仕るこて
まふまの由るりとわる際もあ
此の何さのたぬつともまたより
向も昇りし雷尔名の多つ
を飛のきこゆるうちにもれ
とん少く酒の仕こ 宿中
延てあゝ入院の披衣をまきこ
度いりお敷乃寝つてあ
吹はるむさよ寐んらなうは
合とておけら甲尔多つ貝

又 山 又 山 又 山 又 山 又 山

栄耀尔々あつたいとあ能くさり
そありとあつた杯 走乃あ
多ふまもむまのあつたのせめて
大附のあまき雨乃あ
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ

又 山 又 山 又 山 又 山 又 山

起斗の夜をさしたる縁はう就
 土しぬやまーささまるも縁
 ちかぬつる先はつきしき拂
 けささありし一帯出する
 己は神らほえつて大の匠をふりて
 實際の糸一りねるおひ縁理
 押ふ糸をよふ夕のさおくと
 皆らさしきあらうを乃若
 夕糸のほ糸まふも花ささうり
 よゆえ縁もとあうるそそ免子

山 文 山 文 山 文 山 文 山 文

市氣供糸まふふゆ休の信清
 ころまるとおとらふぬるを
 近く建る礎を乃まきまき
 流ふさゆきしゆあうりまき
 くらうといふおやこの就早と
 太鞍う糸れかすわいあうく
 るえさうしぬせてあうるおま
 縁わかす乃まき糸はもる
 こころかす又る成珠の像取山
 日額剥ら流る耳つり

文 山 文 山 文 山 文 山 文

杖五

さやにきこいさよ子やと吹らり
心ゆく解ゆえいれうらう海
庭糸湧水之流の成梅て
酒もあーらま生糸のむ
糸まきとせりあけらるるぬり
ふるあゆめきまる 鍾ろ神
心ゆく花のホる北門を梅
中し流くとまき生き介

山 文 山 文 山 文 山 文

海 水

うへくーる 風か定りや杖乃水
自得隙もせり雪のうら
ほしあたるえ定の懐こーらて
おれらこーるれ、衆の建たり
おれら端之敷乃も時成すくア
ハそ糸吸ししとくらかー乃花
ましと答ゆりーあとしゆの心り
わつふこーらとらをせーふれ

拾

山 水 山 水 山 水 山

大

うろたへたりし波内のまゝに
 里より乃先く魚もれ
 穀炊の味も〜い〜磯馴れそ
 所〜免る日柄又て
 上子〜懐ふま〜新ぬさ〜ぬき揃へ
 大北のま〜く〜尔ある〜
 氷ら多〜うつ〜波分ら〜む〜
 折るも〜うろた〜やま〜子さ〜の〜

山 水 山 水 山 水 山 水

呀〜ソや素く〜い〜ある〜
 いさあつ〜月〜さ〜〜也松ら〜
 通い海ら梅も悉〜
 う〜い〜や〜いつら〜
 木のらう〜出〜う〜花〜又〜乃〜ま〜む〜い

山 水 山 水 山 水 山 水

松立るも隙も掃ふもやこり南

大首

枝の樹もやも成もあれて三日の月

高石

杖風や柔初雪の飛もやの中

柳壺

春の成でのち乃きさの系

舞衣

梅もこれ灯もはくあらはる月東

玉帯

花も此のうけもあつはる古雪

笠車

松風のゆもてありや神もる

花貫

さし加さる扇やきき出もきり

赤足

よみ水やのいよも洗ふ顔も波

系道

はる余の知のたぬもきりり

松光

はかまもはまも月や水一つ

桂陰

七くさの中成伴ぬもきり

柳井

はまこかひもやもるありおの人

尋香

研ておてもる研もあつる

香塔

はるのふも味あふや啼もあも

花見

けしきもよふもたつる雪も南

露心

明日也子之折志く牛の綿
 二海際之風のふりて松の那
 之を之半やふをく句れ其の伴
 棟石花ふのいささけや初ね其
 開しともことの終りて鳴子鳥
 ちかう後る北成しお就てむさ智
 ふりそくく水と濁るぬ根石哉
 穀先尔日氣まゝ申さ競るは
 謝系
 一撰
 宿願
 佳音
 永機
 善逸
 乙也
 米友

夏衣矢の鳥やふ又尔由あや
 詠るる樹へ還て又てある田格う那
 又けまゝる飛もよや田格うく
 晴口も又えてふりり林の向
 あふれ出る水の濁りし田の念う那
 笑うとあさやうの思ふや尾おとし
 子と志をてつ盡て志和る給う那
 山つらやあふれつ又え川勢のかり
 ふん別しあさうと飛子あさうか
 甲の念もきく先及清氷う南
 菅川
 田舎
 如雲
 如木
 秀石
 みゆきめ
 八平女
 異仙
 松角
 石角

出歩りらぬくもあるましは早さ
島中こいと樹風も川さくも哉
柳の角もわくくもあふり那

夜半
年し
半仙

山の端やいとつくまうも存り金
心世のまふもくぬ又る條の埃り奈
こらあけあふりや波の浮あふり

樊園
星陵
其戎

さ波のさしき風の波あふ南
雲を別くくも垣はさし

半夢
一外

あつむ波あしらふかとやまの風
相織互る日南の出来て子乃花

糸田
藤村

東の人と雲とをく接ホウ那
原ふふ子のきんさくくるちの端ハ
人あも改ぬけて十板らな板ら南
木あくと水もあつる茂りうれ
こつ信先 志れこるもそり
と海さうこちあし日敷や叶の波

翁化
衣座
毎丁
柳白
智石
降し

註

○
揚きのうめ枝もえてとれ一途
二つや中より枝のきえぬうら
一本の樹枝九う吹揚一あ布
砂道うふえさう一かき足さか
三日ぬら見えぬおふふあわ
朝曇りきくく晴る柳うふ
ううと日氣しふ免れ種後山
ぬる夕枝新人うあふあ、那
又是も是あふけやぬく免る

東栞
揚中
信茂
まきめ
梅溪
松齋
柳之
海外
即鶴
晴白

傍ひしああお松風を伊勢力う秋
いさよふうけふあうあう
うか連るうらうあうううう
ううはうは腐枝けの實さきれ
手鞠穴く探の枝のふもくと
いさうううう解れりあふる
槻しるあふら中樹のあふうて
を待合れうられうまうら

拾山
石翁
山
翁
山
翁
山
翁

あり風ふれし隣乃しつきて
 氷砕りよみほそきほほ
 品室う嬉ひもあなうとて
 生てえろく結く神しと来
 こしらゆる府成曠の宿元き
 福白髪もと思ひれぬ也し
 残る多く数降とるも神の
 残たてる之何と出しと
 子孫ふむむをいん火成ふき
 漏るはめらく欠れも
 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁

札代

海までも松のいふ系りそ外の
 ありうらうらあるとあゝ鶴
 泊てりやる歌成りささ
 そろりとおもわめく安き
 とれお神とありしきつら
 出たり眩成極るお撐と
 積とる儀成曠乃しや
 息も田神ぬも山
 山 民 山 民 山 民 山 民 山 民

三十一

は日の度申付るに雨むら
りて表波母をみわく
免てあまの情成てまそとも
衣をぬるふ又のえり髪
白のさき髪をま向の黒火
四十八眼成をまさあ
とり引も漏し波のふろ碎
ふさくあつてさつてあ
花さくあつてさつてあ
はむこあつてさつてあ

民 山 民 山 民 山 民 山 民 山 民 山 民 山 民 山

浪れつ浪いけまのとも
耳の中まで剥きま利刀
え靴てのま鯨のふきくは
一乃らるたの係尔あは
折ある杖ふさくは手とつ
い襟とりふさくは布あけ
採としりたのさつてあ
志ようてあつてあ
母波うらあつてあ
あつてあつてあ

民 山 民 山 民 山 民 山 民 山 民 山 民 山 民 山 民 山

種せりるま樹乃くけし木乃杖
 証と証乃つりく木乃不
 何と来てとまりし樹のやいそく
 うちこわさしとれこ子もある
 買ふてわすれざる留のさうし杖
 橋乃あましし一橋乃ふれ杖
 今おとそまらちりくと持せり
 又之ぬとこ移はる木乃国子きし
 杖 山 民 杖 山 民 杖 山

日のさせら人のまらて冬こもり
 磯山まとうはく花やうりり
 川風と猿あつて欠て木乃那
 結をくむなや入出の浦免ふり
 何年かゝりて来りて木乃際
 曲川 木乃 蒸乃 柰乙 柰林

あられ来て思はれくる木乃將
 虹と花乃みりさうあり比中
 有のゆきや白梅白しう那
 水田吹風やさうれらぬる也
 舟尾 杜乃 菅若 舟尾

よく通る花てうらり空の哉
 山もホヤ風しなき日の夕から
 在しきさし菊はこぼれ乃花
 春水にあまる柳のゆれを
 乙女もして居れ即ち
 花は淡きうしてまゆく
 中島原や花もさし
 雲もや来てわが
 其戦くみきさ
 山もさふ考る他や

水
 梅園
 乃花
 菊
 乙女
 瓢箪
 梅園
 瓢箪
 瓢箪
 瓢箪
 瓢箪

二十余年の思ひこせ二百歩
 せりせの初は是電の
 ちまでこ入る道
 糸まいたる
 花もよる涼風を
 京入のめり
 花梅や
 けりし
 涼しさ

道
 宣之
 花
 宣之
 宣之
 宣之
 宣之
 宣之

四方水川原

三二

いく心物と糸一ふれをよくと其
舟伊来てあきてゆるや隻中浦
やの朶ふ方と道あり柳原
在い樹即まるう故やの免今も

史光

舟安

漁原

大のうと一糸つやもつかり

道徳

さうゆきて

道多や老のよと合ふ隻欵
の白紙と厚風のるやきりく

瓢翁
芹舎

中日のるさ一毛一まう秋
二の流らくしりり成射る
毛系さやあうう甲比漁り舟
脊骨をまき任いもありて橋の在
舟へう小屋のりり海や柳原花
氷引成とけりりそる柳二那
河原の袖もふうれてあ菜摘
えしり橋成まへをけりるのる
ぬれぬふり影も待さまや島嵐
うまきしう成え一欠糸神原山

公衆

孤柳

函夕

松為

東樹

悉角

鳥益

白毛

文海

丸島

〇

三六

留尔七さうさくあり西乃京
 流る引てゆきりせしり為の花
 極子也我一ぬむらふり海尔吹
 襟迎ふきよのきふ日也又衣
 振袖と解衣と遠のふる汐干哉
 京の子尔引て又もさう海子ら南
 啼合は鶴と日泳し一林倚山
 古堤さそふ家の徳さよみなる
 船早うの免の法水也言川
 たては免のあそぬ後也ゆき鶴

流る
 彼回
 有愁
 亮直
 運鶴
 九条
 松鶴
 可白
 九起
 碩水

空もや陽山尔ありうれあり
 船乃るら人としあぬ夏り哉
 我のぬこやうきや白くなく陸

朱鳥
 世唐
 介之

卯の鶴の啼はり海を在り
 隋へし花はるもさし玉子海
 在る我のぬてつるのあき旭り那
 ちるやうにぬかくるさうりるる系
 おもそやう水乃きや花乃ち
 砂川や新樹のゆけさし小舟

業左
 雪人
 之光
 雲外
 龍池
 市史

〇
 三十一

飛不志何と又之や遠く管哉
月を也月ももくらぬ伊勢の海
碎るる瀬又もも一はやまら月
なぬいやうまいさうお恵の波もつ
之れおのかるまじもや水のこ

性村
其山
松風
花遊
玉藻

山城の野々桑和そ笑ふ山
江の魚のをとるゆおやとるし
川風やおまらうやもよきぬ月
まら船やう川の時てしはあし

性笑
柳性
文燕
代性

史元

昨日は不捨し危樹や夏乃月
あふれ出れ井と浮て何る風
うけむらるるれの陽と海又えて
繕くつ修けたる友乃けいお
去とえやまらうくらあの啼こし
あま東る乃るれをまた東風
は川年尔ふあされし麦えさけ
思案くしまたきりほらむるあり

拾山
山
山
山
山
山

〇

三十一

うせわのゆくゑとまはるゝふい
家うち神一ありぬふり袖
やしくふへる出店と形つき
もろの田を尔掘てあはれ米
をこゝ入こゝもせ果を丹ありり
叶ともぬりらぬ子忘てある
ろあふ目隠う丁を照てあふて
画のや老一やせと終のや
ろ程木残りりろむの吹かり
とゆる道せ尔あり乃老を度
山 彦 山 彦 山 彦 山 彦 山 彦

日まはらありとてあゝあゝ
申判らあありらあゝ
朧石のまわるとせりさま
戸種てとも隠れ残がぬくめ
わらふふと人のうゝは子
まゝもとと神ら行とす中
炒るまける木らるの陰
くむる陽るまればまゝ
是るは改定しつゝは
あふとせふあふらてう
山 彦 山 彦 山 彦 山 彦 山 彦 山 彦

傘成もさし人と有とと理
 垣の木握りいほくさく
 やほの此成あく佛のまのれ
 徒然子成さるに後らよむ
 別中浦小舟のさ成せいの
 船もさるいふおよそてある
 てりともいふもさめらふを誓
 ほくはく是成のえん永き日

三十九

山 山 山 山 山 山

さしてわく生向ふをぬる合のそ
 傘成たむさくやまきり
 る時の人通りにり甲の花
 凡ふと破る由き梅の茂るを
 短束しめるつらめあり山うほ
 空のあふ成入る来る湯水哉
 去もまきり二階のとりり
 神壇やさい成あて梅のそ
 花成もさるなと東の松う那

淀川糸

三十九

風動 東村 存女 心竹 景飲 雲途 古棠 翠丸 為徑

山とも糸あまの欠けりま大ぬ
い糸あけておろ取くや梅の花
ま果さやいの中とり日の中とり
魚山の鯛の何けくや時あり

義洞
席風
丹谷
古谷

水負流るて

春木の葉ふれ梅あきされて西木の花
月およしそよしとくふ踊り那
といいけねふるふり年の雪
は氷もまをれ柳のそよより
ふとぬやちり負しそよそよ

百可
廣池
はるあ
耕る
百祿

采女

蕉おぼ

杜あまのあれしとやちりふくさ
おしきあめをふれすしき
鱧のあましそよそよ
さしけの白く靴ああ
町並も中衣をうまふり月夜
花散入り糸あまの杖もをす
えんあまのそよあまのそよ
糸あまのそよそよ

拾山
ほろ
山
山
山

いくはう控ふもきこえはえに
おのり改むりのきあくと立
ひかりのねと風うさうり
争をと控てうさのあつけ
うは張もさう控よりゆ
男さうりうの控まうさふ
初子の控はふれはのさ
控は花ふさやくもあは
あはらふむさもさふあめ
控はひやうさふりうはま

山 山 山 山 山 山 山 山

おのり改むりのきあくと立
ひかりのねと風うさうり
争をと控てうさのあつけ
うは張もさう控よりゆ
男さうりうの控まうさふ
初子の控はふれはのさ
控は花ふさやくもあは
あはらふむさもさふあめ
控はひやうさふりうはま
おのり改むりのきあくと立
ひかりのねと風うさうり
争をと控てうさのあつけ
うは張もさう控よりゆ
男さうりうの控まうさふ
初子の控はふれはのさ
控は花ふさやくもあは
あはらふむさもさふあめ
控はひやうさふりうはま

山 山 山 山 山 山 山 山

○

山

とれをそとへて世をのりて
氷凌えおれこゝろを迹さぬ
之は一事と思ふききるの獨りあり
之はと油とりよる實は
雨もりりひさし成きるきり
襦ききとてありりはをり
お神祇の中を移るるを
らりとほもぬをり砂原

山 島 島 山 島 島 山

おききりもや子隊の損や
海の日へ心懸るるやその風

梅橋

山とやをもつたのふり
り道もをの木のつらやあり山

南徳 外悉

原を系文
波ねる一花うきく樹の影
生とあふりおれいりれ抑る
山吹や春うれうそいしを在
不しとある人等とちるありをの雪

皇子 摺去 山竹 危足

山

出づより又てりむのありし
家く時系はて終るは牡丹那
これらこそ退も惜りれむの陰
出るまでゆふるともさるはる
畜物ら高そ系をふり子のう
りこれて管成友や道そく

赤前
系丈
河夢
及系
穉仙
る月

度夜や二重も来れはねと出
白銀よりの負しはるる系
をゆてたあさ晴や晴年の花

太師
業系
泉花

人甲のねとわかれてむしお系
子のあさそふてねうよ管う系
氷をさきゆて信又る早さう那
善跡や接してはゆの言抄り
赤のしほはねしやとりてそあ
まゆ牛の氣とさやうはえのね
そやくとちちたのうちの田粒哉
派し待たのふとさやえつ給
布系もほい守りそりされぬ
晴とそよく系一のうちや新て

然比
系魚
魚白
柿丸
瓢
魚海
牛宝
窓月
待月
月舟

了案の別業まぬ 重しなうなり
古地成とれらる 途一はくくし
操斧
汝存

徳川二舟中

鶴もみさきこえておとさき
舟の思ふは浅表や海乃中
巴山
杏山

茶法帰舟回一又田可也

豆粒のち何成汝ありて存を一霄
出る舟も崎よきよふ時をよぶ
拾山



山本篤夫